

# きょうと福祉倶楽部だより

## 2018年 2号

### 認知症を患う利用者さんの力から学ぶ —主役は介護職員ではありません—

長岡京市で暮らすOさんは元高等学校の国語教諭で83歳、要介護3。奥さんを病気で亡くしてから一人で暮らしています。

そのOさんもアルツハイマー型認知症に冒されてしまいました。

Oさんは近くにお住まいの息子さんに支えられながら暮らしています。

息子さんは仕事を二なしながら、自分の体調も芳しくないのに通院のお世話から日常のお世話までとてもがんばっておられます。

わたしたちが彼に関わりを始めたのは今から3年ほど前になります。あの頃と比べると徐々に病気は進行しています。元々テニスなどのスポーツを楽しんでおられたので足腰はとてもお元気です。

3年前は認知症があっても自分からお友達が集うテニスコートへ毎日出掛け、得意な書道を教える事もされていたのですが、今はほとんど自宅内で過ごすだけの生活へ変わりつつあります。

それでもご自宅で日々好きな書道を楽しみ、とてもわたしたちには書けない立派な文字を書いていおられます。

初めてOさんの作品を見たとき、本当に驚きました。

認知症が進行してもこんなに素敵な文字を書く力があることを見せて頂き、なんとか彼の力をもう一度発揮して欲しいとわたしたちは考えました。

彼の活躍の場を作る事をお願いした包括支援センターの担当者は、わたしたちの要請を快く受け止め、早速ご本人に面会し、日程も決まりました。

わたしたちが驚いたのはそこからです！

短期の記憶すらおぼつかない彼が講師の依頼を受けたことを忘れまいとメモにそれを書き記し自宅で「お手本づくり」を始めたのです。

それだけではありません。

これまでには頭髪の乱れも気にしなかった彼ですが、「人前で教えるには」と床屋さんに行きたい意思もハッキリ示すようになりました。

先日彼は会場となる場所に移動支援(※ガイドヘルパー)とお出掛けし、書道教室を支援頂ける包括支援センターのスタッフと談笑して二られました。

わたしもその場に立ち寄り彼と「教室」のお話をしてきました。

弾けるような笑顔で受け答えをされる彼の表情。自分の役割を取り戻してやる気満々です。

介護の世界はともすれば本来主役であるはずの利用者が「お客様」にされがちです。

主役は利用者であることを再認識しました。

わたしたちは認知症のある方々の残された力を過小評価していないでしょうか？

Oさんの作品

呼吸の機



書評

## 私と介護

新日本出版社

島田洋七 春やすこ ねじめ正一 酒井章子 大久保朱夏 新藤風南田佐智  
恵 安藤モモ子 富田秀信 香山リカ 沖藤典子 木戸真亜子 野中真理子  
岡野優一

価格 1,620 円 (本体 1,500 円 + 税) 発行年月 2016 年 12 月  
判型 B 6 ISBN 9784406061131

執筆者は自ら介護を体験した著明な人たち。

余儀なく施設入所を選択した家族。最後まで自宅で見送った人。皆それぞれに苦しみ悩み最愛の人の最後のときを考えた体験談。

日頃介護の現場にいるものとしてはこうすればもう少し自宅で過ごせたのではと思う方もいらっしゃると思います。だからといってその選択は否定出来るものではありません。

ただその判断の経過の中で介護を受けるご本人の意思が尊重されたのかは気になることです。この体験談ではその経過をうかがい知ることはできません。

わたしたちは介護を受ける人が支援の中心にいてその人の身体が不自由になったとしてもその人の暮らしの連続性を途切れさせること無く続けて欲しいと願っているだけにその結論に至る過程は気になることです。

いくつもの体験談のなか精神科医香山リカさんの体験にとっても気になる一言がありました。

おとうさんは長く小樽市で医師をされていました。  
年若い、身体を壊し最後には意識障害もあったそうです。そのおとうさんの入院を打ち切りご自宅に連れて帰ったそうです。その時の描写。

「自宅に戻り、いつものベッドに戻すと、意識の無い父の目から涙が…それをみて母も叔母も、『喜んでるね。病院と違って穏やかだね』と言いました」

これはわたしたちが現場で見てきた風景でもあります。

その人にできる介護は一度きりです。やり直すことはできません。

その一度きりの体験が「よかった」と思えるものになってもらいたい。

そのヒントがこの本にはあるように思えます。

## 「キーパーソン」とはなんでしょう？



最近気になるのは社会福祉援助を行う者が容易に「キーパーソン」という言葉を使うことです。

キーパーソンとは当事者の意思決定に影響を及ぼす人と言われます。

ですが、わたしたち福祉援助を行う者の中にはそれを容易に考えすぎている方もいます。

例えば「兄弟だから」、「夫婦だから」というだけでキーパーソンとして良いのでしょうか？

わたしたちが福祉援助をするときに中心に置くのはハンディのある当事者です。その人の自己決定を促す人でもなく本人に不本意な決定を促す人は本当の意味でのキーパーソンではありません。つまり本当の意味でのキーパーソンとはその人と「ともに」考える人である必要があります。

ご本人が不本意な判断をしたとしても「ともに考える」中で相手の変化を待って頂ける方でなければ本人の意志を歪める存在がキーパーソンということになってしまいます。

先日こういう場面に出会いました。知的障害のある方のご兄弟。

本人は支援を受けながら地域で暮らしたいと考えています。

その方の目の前で「あなたは独り暮らし無理」(援助者に)「施設を探してとお願いしたでしょ?!」と。

この人をキーパーソンに設定したならば本人の意思意向を無理矢理変える人がキーパーソンを意味することになります。

もう一度キーパーソンとはなにかを考え直してみませんか？

 有限会社 おとくに福祉研究所  
きょうと福祉倶楽部

〒617-0824  
長岡京市天神4丁目7-12 ハイッ東台101号  
TEL 075-958-2560  
FAX 075-957-2808  
E-mail kyoto-care@club.email.ne.jp

